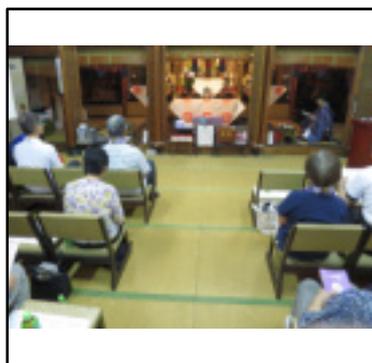


じゅしゅう

秋季彼岸会 嚴修

お彼岸のお中日、曼珠沙華はまだつぼみのままでしたが、秋季彼岸会をおつとめすることができました。

皆さんと一緒に正信偈行譜のおつとめをした後は、堺市旭照寺のご住職、山上正尊先生のご法話をお聴聞させていただきました。ご讃題は「弥陀成仏のこのかたは、いまに十劫をへたまへり、法身の光輪きはもなく、世の盲冥



をてらすなり」

阿弥陀さまが私たちを救いたいと願いを立てられ、成就し仏さまとなられたのは、十劫(計ることのできないくらい)の時間)も昔のことです。以来、私に働き続けてくださっておられますが、その働きは、光によって闇が破られるように、煩惱によって暗闇の中にある私を、智慧の光となって照らし続けておられます、と

第6号
(通算346号)

発行元
浄土真宗本願寺派
吉富山 浄覚寺
大阪市平野区
長吉長原3-1-10
06-6790-8350



いうご和讃でした。

親鸞聖人はお正信偈の中でも、阿弥陀さまの働きの内容を「光」で譬えておられます。帰命無量寿如来(きみんむりょうじゆ)と始まつて、十一行目からですが、無量光(むりょうこう)、無辺光(むべんこう)、無碍光(むげこう)と、十二種類の光が出てきます。量ることのできない(無量)光、際限のない(無辺)光。阿弥陀さまのお徳を讃えていかれる中で、その次の無碍光という、何ものにも遮られることのない光がとても大切なのだと山上先生はお伝えくださいました。



太陽や電気のはきは壁があるとその先に光は届きません。私たちの煩惱の壁も分厚く、とても大きな壁なのだと思えます。だからといって阿弥陀さまは、無理です、止めておきますとは決して言われません。逆に、だからこそ私が必要なんです。たとえ大きな壁であっても、何ものにも遮られることのない私の智慧の光で、誰一人もらすことなく必ず救いとります。いや、他でもない、あなたを照らし続けますとお誓いなのです。

この度は「光」をテーマにしたお話しをいただきましたが、この寺報のタイトル「じゅしゅう」は、実は無量「寿」、無量「光」からきております。阿弥陀さまのお心を少しでもこの紙面でお取り次ぎできればと、心を新たにさせていただきました。

私たちのちかい

一むきほり、いかり、

おろかきに流されず

しなやかな心と

振る舞いを

心がけます

心安らかな

仏さまのように

御文章に聞く(第4回)

今回も御文章(蓮如上人からのお手紙)を味わっていきたいと思います。

御文章の最後は必ずと言っていいほど「あなかしこ、あなかしこ」で終わっています。では、この「あなかしこ」とはどんな意味があるのか、というのが今回のテーマです。

一言で言い表すならば「南無阿弥陀仏」のお念仏でいいのではないかと思うのです。直訳をすれば「あな」は「まあ!」「なんと!」という感嘆詞、感動詞です。「かしこ」というのは現代でも女性が手紙の結語として使われることがあります。「謹んで申し上げます」という意味ですから、それがさらに強調された言葉ということになります。

御文章を書かれた蓮如上人は、もちろん親鸞聖人の教えをいただき、その教えやお気持ちを謹んであなたにお伝え申し上げます、という気持ちであったでしょうが、それだけではないように思うのです。

ご法要の際には必ずご法話があります。お

聴聞させていただきませんが、その時の一番の聞法者は誰だと思えますか? 実はお話をしている話し手本人なのです。参拝者に向かってお話しをしているのですが、口に出して話すということは、一番近くに耳がある人、つまり自分自身が真っ先に聞き手となるのです。

話すということは教えるに、そして自分自身にも向き合わなければなりません。手紙もそうだと思います。相手のことを思いながら書きますが、実はまず先に自分の気持ちと向き合わなければ書けないはずなのです。

蓮如上人もたくさんのお手紙(御文章)をお書きになりました。最後の「あなかしこ」には「謹んであなたにお伝え申し上げます」という気持ちとともに、「阿弥陀さまのお慈悲、親鸞聖人の教えを、この蓮如、有難くいただきました」という喜びの気持ちがあふれているのではないのでしょうか。だからこそ、「あなかしこ」が「南無阿弥陀仏」と聞こえてくるように思います。

仏教語辞典



赤
あ
か
い
い
糸

藤原道長が亡くなる前、自ら建立した法成寺の阿弥陀如来像の前に床を敷き、阿弥陀如来像の指と自分の指を五色(青黄赤白黒)の糸をつなげて極楽浄土への往生を願いながら息を引き取ったという。

編集後記へつづく

『気になる仏教語辞典』
著・麻田弘潤 誠文堂新光社
仏教にまつわる用語をイラストとわかりやすい言葉で読み解かれています。ぜひお買い求めください。

編集後記

今月も「じゅごう」をお届け致します。

結婚をして十三年と少し、マンシヨンでの生活をさせていたれておりました。記念法要が終わり、お寺に戻ってくる準備を進めていたのですが、別住まいがある間に水回りなどのリフォームは計画通り。ただ、どうせならせっかくだからと少し工事が長くなってしまいました。

色々とありましたが、九月中旬にようやく引っ越しをさせていただき、新しい生活が始まりました。お彼岸の法要、様々な住所変更の手続きなどがあって、未だ荷ほどきがままなりません。暫くは落ち着かない日が続きますが、家族ともども、未永くお付き合いの程、宜しくお願ひ申し上げます。

(釋法道)

その逸話と、唐の韋固が月夜に老人から未来の妻を予言されたという「月下老人」という縁結びの伝説から「運命の赤い糸」と言われるようになったそう。

行事案内

日時・十月十九日(土) 十四時・十九時
行事・永代経法要
法話・小村 賢昭先生 本願寺派布教使(大阪)
場所・長原 浄覚寺
(なお、当日のお参りはお休みをさせていただきます)



十一月十五日(金) 十三時半
津村別院 報恩講法要 参拝
十一月二十七日(水) 十四時
顕証寺 報恩講法要 参拝